＜競馬担当各位＞

２０２６年１１月２０日
Ｊ　Ｒ　Ａ　報　道　室

ジャパンカップ 出走予定外国馬プロフィール

➢ テアオ（ＴＥＡＯ）＝ アメリカ

牡４歳・芦毛（チリ産・2022 年 10 月 1 日生まれ）
父：Ya Primo ＝ 母：Ti Ricorderai（母の父：シーキングザダイヤ）
馬 主　：ドンアルベルトステーブル
調教師　：ジョン・サドラー
騎 手　：ルイス・トーレス
戦 績　：全 12 戦 6 勝、2 着 3 回、3 着 1 回
総獲得賞金：約 5,930 万円
主な戦績　：’26 ラテンアメリカ大賞（G1）　1 着
’26 チリダービー（G1）　1 着
’25 グランクリテリウム（G1）　1 着
’25 チリ 2000 ギニー（G1）　1 着

芦毛のテアオはチリ南部のロスアンヘレスに位置し、同国最大の競馬事業組織であるドンアルベルト牧場の生産所有馬です。父のヤプリモ（その父マスタークラフツマン）は現役時の 2019 年にチリダービーとラテンアメリカ大賞を制した後に、アメリカに移籍（3 戦して G2 の 2 着が最高）。チリに戻って種牡馬入りし、本馬以外の主な産駒にリステッド競走を勝ち、G3 で 2 着 3 回、G1 のチリオークスで 5 着の実績があるライヌイがいます。

母の父はシーキングザダイヤで、主に日本のダート戦線で活躍後に種牡馬入りし、アメリカを経てチリに渡ってからは G1 ウイナーを 10 頭送り出して、2 度のチャンピオンサイアーに輝きましたが、この 10 月に繋養先のドンアルベルト牧場が同馬の死亡を発表しました。その産駒である母のティリコルデライは現役時に芝の 1,000m～1,200m で 4 勝、リステッド競走で 3 着。テアオは 6 番仔で、兄姉 5 頭は全て勝ち上がっており、中でも半兄プレセンテチャ（父コンスティテューション）は 1,000m～1,200m で 12 勝を挙げています。曾祖母のトナリダッドはチリの最優秀古牝馬で、母系からは G1 ビニャデルマール市賞など重賞 3 勝のトノ、G2 ベラーノアルトゥーロクシーニョ L 賞のタヴェルネラ、G2 リベルタドールベルナルドオイヒンス賞のトキオなど、チリの重賞で活躍した馬が出ています。

テアオはドンアルベルト牧場のカルロス・ヘラー・ソラーリ氏の所有馬としてフリオ・オレリャーナ厩舎に預託され、2 歳時の昨年 1 月にデビューしました。最初の 3 戦は首都にあるクルブイピコデサンティアゴ競馬場の芝レースを使われ、初戦（1,000m）は後方から伸び切れずに 4 着、2 戦目（芝 1,200m）は先行して押し切りを図ったもののクビ差かわされて 2 着、3 戦目（芝 1,300m）は好位を追走も直線で後退して 6 着と結果が出ませんでした。

4 月に入り同じサンティアゴにあるチリ競馬場の 2 歳未勝利（ダ 1,500m）に出走すると、初のダート、左回りとなりましたが、後方の 8 番手から 365m の短い直線で手応え十分に差し切り、3 馬身 1/4 差で快勝しました。以降、この年の 12 月まではチリ競馬場の重賞戦線を進みます。5 月のビクトルマテティッチフェルナンデス（チリ、G3、ダ 1,500m）はハビエル・グアハルド騎手との初コンビで 2 番人気に推され、後方待機から直線で脚を伸ばしたものの、快調に逃げた 1 番人気アポロレイに独走を許し、10 馬身 1/4 離された 2 着でした。

続く 6 月のクリアドーレス大賞（チリ、G2、ダ 1,600m）も 2 番人気で、中団から外に持ち出されながら直線を迎えると、残り 100m を切って先頭に立って 1 馬身半差で重賞初勝利を飾りました。その 3 週後に訪れた初 G1 の舞台、タ

ンテオデポトリージョス(チリ、ダ 1,500m)は 2 歳シーズン終盤から 3 歳前半にかけて行われるチリ競馬場のダート四冠競走の初戦。1 番人気に推され、8 番手から直線で先頭を窺いますが、外から伸びたニューエンパイアの脚色が勝って 3/4 馬身差の 2 着となり、2 歳シーズンを 7 戦 2 勝、2 着 3 回で閉じました。

7 月に新たなシーズンに入り、テアオは 9 月の四冠第 2 戦、チリ 2000 ギニー(チリ、G1、ダ 1,600m)で 3 歳初戦を迎えました。14 頭立ての 4 番人気でしたが、9 番手の内から外を回って先頭を射程圏にとらえると、先に抜け出した断然人気のアポロレイを残り 100m でかわし、最後は 3 馬身の差をつけて初の G1 タイトルとなりました。次いで、四冠 3 戦目のグランクリテリウム(チリ、G1、ダ 1,900m)は堂々の 1 番人気となり、7〜8 番手から先行集団に接近すると最終コーナーで先頭へ。直線でも力強く伸びて後続を引き離し、7 馬身差の圧勝で G1 連勝を果たしました。

12 月の四冠最終戦、チリセントレジャー(チリ、G1、ダ 2,200m)はそれまでのグアハルド騎手が直前に 90 日間の騎乗停止処分を受けたため、アメリカで活躍するチリ出身のヘクター・ベリオス騎手が代役に選ばれました。ここも本命となって期待されましたが、5〜6 番手から直線に入ってアップアンドフライトと先頭を争うものの、これをかわすことができないまま、外からアポロレイにかわされて、3 着で終えました。

年が明けて 2026 年となり、サンティアゴの北西で太平洋に面するバルパライソ競馬場で行われたチリの三冠最終戦のチリダービー(G1、芝 2,400m)へ進みます。前述の四冠は全て同じチリ競馬場のダートで争われますが、チリ三冠はクルブイピコデサンティアゴ競馬場のエルエンサージョ(G1、芝 2,400m)、チリ競馬場のチリセントレジャー、そして左回りのバルパライソ競馬場のチリダービーと、主要 3 競馬場を舞台に芝・ダート混在で構成されます。2 月 1 日のチリダービーはチリセントレジャー優勝馬アポロレイ(1 番人気;3 着)、エルエンサージョ覇者クリエイテッド(3 番人気;10 着)を含む 16 頭立てとなり、テアオは新コンビとなるルイス・トーレス騎手を鞍上に 2 番人気で発走を迎えました。ほぼ最後方の位置取りのまま約 600m の直線を向いたテアオは、外に導かれて進路を確保すると持ち味の末脚を発揮し、ゴール直前で内のノチェスブリメをわずかにかわし、ダービー馬の称号を得ました。

この後テアオは初の古馬との対戦となる 4 月 26 日のラテンアメリカ大賞(G1)へ向かいます。ラテンアメリカ大賞は南米競馬機構(OSAF)に加盟するアルゼンチン、ブラジル、チリ、ペルー、ウルグアイなどの競馬主要国で毎年持ち回りにて開催され、今年はペルーの首都リマのモンテリーコ競馬場の左回り芝 2,000m が舞台となりました。レースは最初の 800m を 49 秒 14、1,200m を 1 分 12 秒 25 のペースで進む中、前走に続いてトーレス騎手が騎乗したテアオは内ラチ沿いの 11 番手を進むと、外に進路を切り替えながら徐々に前へ接近。外を回って迎えた直線ではトレードマークの鋭い伸び脚で残り 200m を過ぎて先頭に立つと、危なげなく 2 馬身差で快勝しました。

G1 ばかりを 5 戦して 4 勝、3 着 1 回で 3 歳シーズンを締めくくったテアオは、このシーズンのチリの年度代表馬および最優秀 3 歳牡馬に選出されました。オーナーサイドは、良績のある左回りで末脚が活きる長い直線を有する東京競馬場のジャパンカップをテアオの次の目標に定めますが、日本とチリの間にでは直接輸入が認められていないため、アメリカのジョン・サドラー厩舎へ移籍させることになりました。当地でのデビューとなる予定だった 9 月 26 日のシティオブホープマイルステークス(サンタアニタパーク、G2、芝 1,600m)は厩舎の判断で出走取消になりましたが、その後も順調にサンタアニタパーク競馬場のオールウェザートラックなどで追い切りを消化しています。

テアオの通算成績は 12 戦 6 勝、2 着 3 回、3 着 1 回です。芝では 5 戦 2 勝、2 着 1 回、ダートで 7 戦 4 勝、2 着 2 回、3 着 1 回。右回りでは 3 戦して 2 着 1 回ですが、左回りでは 9 戦 6 勝、2 着 2 回、3 着 1 回で 4 着以下が無く、芝に限れば 2 戦 2 勝となっています。芝 2,400m は勝ったチリダービーの一戦のみで、その持ち時計は 2 分 25 秒 42(良馬場)です。ラテンアメリカ大賞を勝った直後のロンジンワールドベストレースホースランキングではレーティング 120 でメイショウタバルと並ぶ世界 16 位タイに評価されていました。

＜競馬担当各位＞

２０２６年１１月２０日
Ｊ　Ｒ　Ａ　報　道　室

ジャパンカップ 出走予定外国馬関係者プロフィール

➢ テアオ（ＴＥＡＯ）

● 馬主：ドンアルベルトステーブル（Don Alberto Stable）

チリ競馬界で最大手のドンアルベルト牧場のアメリカでの馬主名義です。ドンアルベルト牧場は、著名なタラパカ牧場の創設者アルベルト・ソラーリの娘であるリリアナ・ソラーリ・ファラベラと息子のカルロス・ヘレルとアンドレアによって 1987 年にチリ南部のロスアンヘレスに設立されました。2000 年代に入ると生産者としても馬主としてもチリで傑出した地位を確立。チリでリーディングサイアーに輝いたシーキングザダイヤやメンデルスゾーンなど海外から種牡馬を積極的に導入し、これまでに本馬やその父ヤプリモ、チリ三冠馬フォルティノといった年度代表馬を生産・所有しています。現在ではチリをはじめ、アルゼンチン、イギリスなどに拠点を構えています。

アメリカではドンアルベルトコーポレーションを設立、ケンタッキー州のヴァイナリー・ファームを購入して同国の競馬界に本格参入。主な生産馬に 2023 年のベルモントステークスとトラヴァーズステークスを制したアルカンジェロ、2024 年のアーカンソーダービー勝馬ムース、日本でオープンクラス入りしたシンビリーブなどがいます。ドンアルベルトステーブル名義での主な所有馬に 2017 年エクリプス賞最優秀牝馬スプリンター、2018 年同最優秀ダート古牝馬のユニークベラ、共有名義では 2017 年ブリーダーズカップダートマイル優勝のバトルオブミッドウェー、昨年のプリークネスステークスなど G1・3 勝のジャーナリズムなど。ドンアルベルトコーポレーションの立ち上げで中心的な役割を果たしたカルロス・ヘレル・ソラーリ氏は、一家が創業した通信、運輸、農業などを手掛けるチリの複合企業「ベシア」ならびにクルブイピコデサンティアゴ競馬場の社長なども務めています。

● 調教師：ジョン・サドラー（John Sadler）

1956 年 7 月 30 日生まれ、カリフォルニア州ロングビーチ出身。高校時代はサンタアニタパーク競馬場のトム・プラット厩舎を手伝いながら、障害飛越競技の選手としてオリンピックの選考会にも参加しました。オレゴン大学卒業後は獣医助手となりましたが、デビッド・ホフマンス、エディ・グレッグソン両厩舎の調教助手を経て、1978 年に調教師ライセンスを取得して開業。翌年初勝利を挙げると、1982 年にローリンググリーンハンデキャップ（G3;ドンロバート）で初重賞、2004 年にヴァニティハンデキャップ（ビクトリーエンカウンター）で初 G1 タイトルを飾りました。1991 年にはサンタアニタパーク競馬場で史上初めて行われた 2 頭によるマッチレース（ダート 800m）で、自身が管理するサラブレッドのヴァリアントピートがクォーターホースの強豪グリズウォルドを下して、大きな話題となりました。

三冠競走での優勝はありませんが、これまでの主な管理馬に 2022 年のエクリプス賞年度代表馬で産駒が今年日本でもデビューしたフライトラインをはじめ、2015 年の最優秀 3 歳牝馬でクレメント L. ハーシュステークス（2 勝）など G1 を 6 勝したステラーウインド、2018 年ブリーダーズカップクラシックなど G1・5 勝で同年最優秀ダート古牡馬のアクセラレイト、2024 年ブリーダーズカップダートマイル勝馬のフルセラーノなどがいます。賞金順のリーディングでは 2010 年と 2018 年の 8 位が最高。ハリウッドパーク、サンタアニタパーク、デルマーなどの各競馬場でリーディングの実績があり、通算勝利数は 3,000 を視界にとらえています。

今年は 11 月 18 日現在、G2・4 勝を含む 296 戦 56 勝で、獲得賞金 507 万 270 ドルはリーディング 27 位。今回のジャパンカップが管理馬の日本初出走となります。

● **騎手：ルイス・トーレス（Luis Torres）**

1972 年 11 月 5 日生まれ。アメリカで殿堂入りを果たしたホセ・サントスなどチリを代表する数々の名騎手を輩出する中南部コンセプシオンの出身。父はレースや調教のタイムを測定する競馬場の職員、弟のパトリシオ、クリスチャンは騎手（ともに現在は引退）、叔父たちも騎手や調教師という競馬一家で、コンセプシオン競馬場の厩舎地区で育ちました。同競馬場で厩舎仕事を手伝い、その後サンティアゴへ移ってギジェルモ・アギーレ厩舎で攻馬手を務めて経験を積み、1989 年 2 月に騎手デビュー、6 月にコンセプシオン競馬場で初勝利を挙げました。

サンティアゴを拠点にチリを代表する騎手として活躍し、同国の年間リーディングに 1992 年から 2001 年まで 10 年連続で輝き、1992 年に 270 勝、翌年に 310 勝、1996 年に 315 勝、そして 2000 年に 321 勝と同国の年間勝利数記録を計 4 回も更新しました。チリ三冠では、エルエンサージョメガを 1995 年ウサレス、1999 年クリスタルハウス、2000 年ペナマコール、2003 年ペル、2005 年ポルフィド、2013 年スポシートで 6 勝、チリセントレジャーを 1999 年クレマカラメル、2002 年ブルーシー、2007 年クルバットの 3 勝、チリダービーを 1999 年バルガルデナ、2006 年ポルフィド、今年のテアオで 3 勝。同じく今年テアオで制したラテンアメリカ大賞は 2004 年（チリ競馬場開催）にもコマンドインティモで勝っており、ここまでの G1 タイトルは 70 を超えています。

通算勝利数は 4,000 の大台にのり、「エル・マヒコ」（魔術師）の愛称を持つルイス・トーレス騎手は、今回のジャパンカップが日本での初騎乗となりますが、アメリカでも 2007～2014 年にスポットで騎乗し、当地で 215 戦 25 勝の成績を残しています。